身近なまちの風景物語(33)

長生の様式

いぶし銀の瓦や風雨に耐えてきた黒漆喰の壁、存在感のある重厚な伝統的商店。街道筋の殷賑(いんしん)が偲ばれる。

ふと隣を見ると、建物正面に細微なデザインがされた商店が並んでいる。伝統的建造物よりは新しいが、かといって最近の建築ではない。

商店の正面にモダンな装飾が施された建築様式は、現在では看板建築と呼ばれる。もとを辿ると、関東大震災後、中小の商店によって多く建てられた店舗併用の都市型住宅である。

ほとんどが木造で、建物前面の壁が垂直に立ち上がり、モルタル、銅板やタイルなどで洋風の修飾がされている。伝統的な在来工法の建築を基本としながら、道路からは洋風建築のように見える商店である。

現在の建築基準法の前身である市街地建築物法によって、建物は敷地の境界から道路にはみ出すことは認められなかった。それまでの商店のように、道路上部に軒がはみ出せなくなった。

また準防火という観点から、外壁は不燃材の材質で覆うことが求められた。

こうした背景から、道路境界のギリギリに建物を配置して前面の壁を立ち上げ、商店としての装いをすることで看板建築が誕生した。

震災後、東京では地方から多くの大工たちがやって来た。看板建築は、関東地方を中心に東日本に多く見られたが、これは震災復興期に東京に来た職人の地元と重なるという。復興が一段落した後、これらの職人が地元に帰ることで、この建築様式が地方にも広まったとみられる。

無名の職人たちが、都市や商業の近代化を纏うわが国独自の建築様式を生み出した。

石岡や下館では、今でもこの看板建築をあちこちで見かける。そして何より新鮮な昂りを覚えるのは、現役の商店があることだ。建物を大事にしながら生業を維持している。歴史上の遺物ではない。近代化の履歴が生きた現物としてまちに存在する。

連綿と続く商店街の息づかいがまち並みに表れている。

野中 勝利
筑波大学　大学執行役員　芸術系長　教授

挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程２年）